

村岡倫編

『最古の世界地図を読む——「混一  
疆理歴代国都之図」から見る陸  
と海——』

(龍谷大学アジア仏教文化研究叢  
書 16)

法蔵館 二〇二〇・二刊

A5 二九八頁 三五二〇円

龍谷大学大宮図書館に所蔵される『混一  
疆理歴代国都之図』(以下混一図)は、最古  
の世界地図の一つとされる。本書執筆者の  
一人である渡辺久を代表とする科学研究費  
補助金研究『「混一疆理歴代国都之図」の  
歴史的分析——中国・北東アジア地域を中心とし  
て』は、二〇一四年に研究成果報告書を刊  
行しているが、本書はその内容を発展させ  
たものとなっている。本書には村岡倫によ

るはしがきのほか、計五本の論考が収録されている。

冒頭の濱下武志「海洋が生んだ世界図―龍谷大学蔵『混一図』が示す海域像」は、混一図の海域図としての特徴を分析している。本図はモンゴル時代の地理情報をベースに一四〇二年に朝鮮で作成されたものであるが(龍谷蔵の混一図は一四八一〜八五年頃に作成された改訂版)、描かれた当時は明朝の朝貢秩序が海域世界を包み込み、海域をめぐる世界的変化が存在していたと指摘する。

村岡倫「モンゴル帝国時代の国境なき交流の道」は、混一図が描かれた当時の「世界認識」について検討を加えているが、同図が日本について九州を北、本州を南に描く理由について論じる部分は、邪馬台国論争にも関わる。また、モンゴル高原において丸囲みなどで強調されるいくつかの地名についても考証しており、それらは中国とモンゴル高原、モンゴル高原と中央アジアをつなぐ交易交通ルート上の重要地点であったことを明らかにしている。

中村和之「『混一図』に描かれた北東アジア」では、北東アジアから日本にかけて

の混一図の内容を取り扱っている。混一図のアムール川とウスリー川流域には地名が見えるのに対し、日本海沿岸については見えない。この点に中村は注目し、クビライ時代以降、北東アジアの女真の活動が河川交通の利用に封じ込められていたと推測する。

混一図のデジタル情報を用いた原図の復元を進めている岡田至弘は「混一図」の保存のためのデジタル修復・複製」で、これまでの混一図の解析方法についてまとめている。

最後に渡邊久「龍谷図」の彩色地名・歴代帝王国都および跋文」は、まず混一図上部の「歴代帝王国都」と下部の跋文について、丁寧な注釈を加えて検討している。また図中で四角や丸で囲んだ枠中に朱や黄色で彩色を施し、地名を書き込んでいるものをとりあげ、関連する史料を提示し、そのように彩色で強調される意味についても考察している。

本書は宮紀子『地図は語る モンゴル帝国が生んだ世界図』(日本経済出版社、二〇〇七年)に続く混一図をめぐる一般書であ

り、同図に関する最新の知見を得ることができる。東アジアの人々が世界をどのように認識していたかを歴史的に考える上で、本図の研究の更なる深化が期待される。

(山本明志)